

フアールのまなざし

波多 美理愛

「フンコロカシ、おもしろいねえ。不思議  
だねえ。」

本を読む私のとなりで夕食を作っていた母に、  
不意に話しかけていました。いいえ、もしか  
したらひとり言だったのかもしれない。私  
は本当は虫がきらいです。だから図書館で「  
フアール昆虫記」という題名を見た時、あ  
まりきょう味を持ってませんでした。でもこの

2

本を読んでいると、フンコロカシもかわいら  
しいものに感じられてきました。

これはたぶん、フアールのやさしいまな  
ざしによるものではないでしょうか。フアール  
ブルは、虫を愛するものとして見ていたので  
す。私は今までそんなふうには虫を見たこと  
ありませんでした。フンはきたないものとい  
う思いこみがありました。でもフアールは、  
フンコロカシについてどんどん調べていき、  
色々な習性を発見していきました。だから私

はフーブルのよな目を持つ人に出会い、  
 へそんなふう自然を見れたらいいな  
 と、すっかりあこがれてしまったのです。

フーブルについても、知りたくなりイ  
 ンターネットで調べてみると、東京にフー  
 ブル昆虫館、虫の詩人の館、という資料館が  
 あると知り、早速行ってみることにしました。  
 フーブルが生まれた南フランス、サン・レ  
 オン村の家が本物のざい料でさいげんされて  
 いて、昆虫記に登場する昆虫の標本も見るこ

とができました。資料館で昆虫を見ていく  
 ちに、虫の種類はほかの動物とはくらべもの  
 にならないほど多いことに気がきました。館  
 長さんの説明の中に、「地球の主人公は虫だ  
 ちかもしれないぞ」という言葉がありました。  
 虫のいる場所には、虫をえさにする鳥や大き  
 な動物も集まります。虫が住みやすい場所は、  
 人間や動物にとっても住みやすい場所だとい  
 うことです。

フーブル昆虫記は、フーブルとい

う虫が好きな作者が、たくさんの虫を約六十年間も観察して書いたものです。道を歩いていても気付かずに通りすぎてしまいそうな小さな虫たちも、よく観察していくと色々なことばかりあります。知りたかりだったフーブルが残した観察記録には、昆虫が生きていく知恵があちこちに書かれていました。すいこまれるように読んでいくと、大自然のひみつまでわかってしまいそうでした。

自然界にはいくつのフンがあるのでしょうか。

か。フンコロガシはそれを食べて、利用して、地球のそうじまです。しかもこの仕事には、たくさんの生き物がさんかしています。フンも動物もみんなかい体されて、消化されていくのです。私もこの大きな自然の中で、ほかの生き物と共ぞんし合っで生きているのだと深く考えさせられました。

そこで私は、地球の未来のすがたを相心ぞうしてみました。このままニ酸化炭素がふえ続けたら、三十年後はどうなるのかな。ひさん

7

な未来も、明るい未来も、その中心にいるのは私達です。私達がこの地球のために何かできるか考えていくところ、それが大切なのです。てのひらでそつとつかめるほどの小さな虫が、生き物としての活動によつて地球を守つていきます。私達はこんなにも大きくて、深いことを考える知恵もあります。私達にも何かできるはず。たとえばゴミひろい。フンコロガシのような虫や植物が安心して生活できるようにするのも、りっぱなはたらきかけです。

8

近くへ行く用事なら自転車を使つてみてはどうでしょう。いつもは見すごしてしまう草や花のにおいに気付けるかもしれません。考えられることは、全てとても小さなことばかりです。でも大切なのは、一人一人ができるだけの努力をすることです。それが合わされば大きな力になると信じていることです。小さな虫にも、世界をすくう手助けができるのですから。フーブルはかせが私達の知恵とアイディアを期たいして、ほほ笑んでいるす

か  
た  
が  
目  
に  
う  
か  
び  
ま  
し  
た  
。